

【新聞活用教育】 高等学校2学年／地理歴史科（日本史B）／特別活動（生徒会）（人権教育活動）
「新聞記事で生徒の教材に対する親近感を高める」―学習意欲と表現力の向上を目指して―

指定校1年次 長野県田川高等学校 先 皇太

（１）本年度のN I E 活動の概要

研究指定校1年目の本校では、①生徒がより新聞に触れることができる機会を増やすこと、②新聞の表現方法を特別活動（特に生徒会と人権教育活動）に置換し活動を豊かにすること、③昨今重視されるI C TとN I Eの親和性を検討すること、④教科授業のなかで新聞を活用して生徒が生きる実社会とのつながりを感じる学びを設計すること、上記4つのことを目標としてN I Eの実践を計画した。

上記の目標を踏まえ、今年度は2学年、地歴公民科、特別活動（生徒会）（人権教育活動）で、N I Eの実践を行ってきた。その際、新聞の「読む」という側面だけではなく、記者の足によって情報を獲得するという作成までの「過程」、記事のバックグラウンドとしての情報の「正確さ」、新聞による「表現」といった、新聞の特徴をとらえた活用教育に取り組んだ。

これらの実践を通して、生徒が学ぶ教科授業や各種の学習活動と、実社会で起きている様々な事象のつながりを、生徒が感じ、考察できるような学びを行うことができた。

（２）本校のN I E 活動の取り組み状況

本校は全校生徒526名、各学年5クラス、全15クラスの全日制普通科の公立高校である。令和2年度に各教室に電子黒板が設置され、令和3年度入学生より一人一台タブレットでの授業、それにともなう教育アプリの導入（すらら、ロイロノート）など、この数年でI C Tを活用する環境が一気に整備されてきた。

今年度よりN I E研究指定校となったが、それ以前から各学年のフロアに新聞を読むための書見台を設置しており、日常的に新聞に触れられる環境を作ってきた。また、2学年では、進路指導担当の職員による、生徒が関心を持ちそうな記事、就職活動に関わる記事などを学年フロアの廊下に掲載し、生徒が新聞記事に目を向けやすくすることで、生徒が自身の進路、未来に関わる情報を獲得する機会を設けている。

生徒の家庭の多くは新聞購読をしておらず、家庭で新聞を読む経験は少ない。新聞に親近感を持ってない生徒が多いことを意識した上で、学校においてどのように新聞を活用するべきなのかを今後も検討していく必要がある。

（３）N I E 活動の狙い（育てたい力）

本校には「尚学共助―学ぶ心を尚（とうと）び、互いに教え励ましあう―」という建学の精神を持っており、この建学の精神に則り、集団生活で相互に助け合い、一般教養とコミュニケーション力を身に付け、そして将来の地域経済・福祉に貢献することを目指す生徒の育成を目標として掲げている。そのような目標を掲げている本校では、本年度の教科学習・特別活動でのN I E活動を通して、以下のような力を育てることを狙いとした。

- ① 現代社会を著す記事を読み、生徒自身の教科学習・特別活動とのつながりを見出す力
- ② 新聞から得た情報を収集し、整理、表現する力
- ③ 正確な情報から記事を作成するプロセスを、生徒自身の思考・判断・表現をする学習に置換する力

(4) 全校での取り組み

① 新聞閲覧コーナーの整備

今年度よりNIE研究指定校となっているが、それ以前から本校では各学年のフロアに新聞閲覧のための書見台を用意し、各学年で購読している新聞（1学年：信濃毎日新聞 2・3学年：朝日新聞）を閲覧しやすい環境となるよう心がけてきた。

朝のSHR前や休み時間、放課後などの時間に新聞を読む生徒や職員の姿が見られ、この環境整備が新聞に触れる機会を増やしていると考えられる。



閲覧コーナーで新聞を読む生徒の姿

② 人権教育活動でのNIEの実践

本校の人権教育委員会（校務分掌）と連携し、現代社会に生じている様々な人権課題に関する新聞記事を掲示する機会を設けた。男女格差や性的マイノリティの問題、新型コロナウイルス感染拡大、ヤングケアラー、ウクライナの人権問題など多岐にわたる新聞記事を廊下に掲示し、現代社会の人権課題に触れる場とした。



人権教育委員会による記事の掲示

③ 生徒会活動でのNIEの実践

本校生徒会内の新聞委員会の活動の活性化を目指して活動した。これまでの新聞委員会は、生徒会行事の通知などの掲載を、他の委員会から依頼を受けたときに、新聞作成する委員会であった。しかし、今年度からは新聞記事を作成するにあたって、新聞委員が自らインタビューを行い、得た情報を新聞記事にするという取り組みを始めた。発行号数こそすくなかったものの、今年度本校に着任した宮坂幸登校長や、文化祭でコラボ商品を作った地元企業様へのインタビューを実施し、新聞を作るプロセスを通して、情報を表現する力を養った。

今年度の新聞委員会の活動は、令和4年8月14日(日)信濃毎日新聞「ヤンジャ」に掲載された。来年度以降も、新聞委員が自らの足で獲得した情報をもとに新聞記事を作成する活動を継続予定である。



令和4年8月14日(日)信濃毎日新聞「ヤンジャ」
田川高校の新聞委員会 「自ら取材 紙面一新」

(5) 公開授業などの活動内容

- ①日時 令和5年1月24日(火) 5時限目(13:30～14:20)
- ②場所 長野県田川高等学校 235教室(2棟3階・2年4組HR教室)
- ③学年・講座 2学年D講座(男子18名 女子10名)
- ④授業者: 地歴公民科・教諭 先 皇太
- ⑤ご助言: 長野県NIE推進協議会アドバイザー 岡本力 先生
長野県教育委員会事務局学びの改革支援課指導主事 佐久浩信 先生
- ⑥科目・単元: 日本史B「産業革命と社会の変化」

(1) 単元指導計画(全8時間)

- 1 産業革命に起因する諸事象
- 2 繊維工業の発展
- 3 重工業の確立
- 4 社会資本の発展と財閥の形成
- 5 社会問題の発生(1) -劣悪な労働環境の実態- …(本時 5/8)
- 6 社会問題の発生(2) -劣悪な労働環境から改善を目指した活動へ-
- 7 社会問題の発生(3) -環境破壊と社会運動の開始-
- 8 単元のまとめ

(2) 本時の計画

1. 本時の題目(学習問題と主な学習活動)

現代の諸問題を意識しながら、学習問題(授業内では、「本時の“問い”」と表現している)として「明治期の経済成長の裏で起こっていたこととはどのようなものか?」を設定し、明治期の過酷な労働環境を学び、まとめる。

2. 本時の目標

現代の労働問題への意識を持ったうえで、明治期の歴史的経過のなかの労働問題、そしてその改善に向けた動きを諸資料から読み取り、理解する。さらに、歴史から学んだことを念頭に、現代社会の労働問題についてどのように向き合うべきなのか、自身の考えを表現することができる。

3. 本時の展開

段階	学習内容 (指導内容)	指導上の留意点	時間	備考 資料
導入	・前時の復習 ・資料から経済成長と生活満足度に比例関係がないことを認識し、経済成長の裏に何があるのか考え、その予想を立て、JamBoardに示す。 ・ロイロノートで配信された新聞記事から、労働問題を読み取り、明治期にも同様な問題があったのではないかと問題意識を想起する。	・新聞記事から現代社会の諸問題を生徒に読み取らせ、Google JamBoardで生徒の声を集め、他の生徒と共有できるようにする。 ・読み取りが苦手な生徒には巡視を行うなかで方法を指導する。	15分	・授業プリント (資料1「生活満足度と一人当たり実質GDPの推移(1960～2010年)」を含む) ・新聞記事(①～④) ・ロイロノート
【本時の“問い”】明治期の経済成長の裏で起こっていたこととはどのようなものか?				

展 開	・予想をたてる ・新聞記事⑤をもとにしたワークシートを使って、新聞記事に示される労働者の実態を諸資料から読み取って書き入れる ・諸資料から読み取れない職工たちの実態を、新聞記事から読み取り、まとめる ・ここまでの活動で分かったことをもとに、当時の職工の過酷な労働環境をまとめ、ロイロノートで報告する。 ・まとまったところで、教員による当時の実態の説明を聞く ・労働環境を理解し、過酷な状況に置かれた労働者はこの後どのような動きをしていたのか予想を立てる。	・読み取りが苦手な生徒には巡視を行うなかで方法を指導する。 ・新聞記事からの読み取りの際には、「線を引く」などの具体的な支援をする。 ・ロイロノートの提出箱を共有可能状態にし、他者の考えを見ることができるようしておく。 ・過酷な労働環境におかれた職工たちがどのようにそれを乗り越えようとしたのか、問いかける。	25 分	・授業プリント (新聞記事⑤含む) ・ロイロノートでの配布資料①～③ ・ロイロノート
ま と め	・R80を用い、本時の“問い”の答えをまとめ、Google Classroomに提出する。 ・本時内でたてた予想をもとに次の授業を進めることを意識する。	・Google Classroomに提出用の課題をタブレットに送る	10 分	・Google Classroom

※ 使用した新聞記事

- ① 信濃毎日新聞 2016年10月15日(土) 電通新入社員自殺 「もう体も心もズタズタ」 SNSに悲痛な訴え
- ② 信濃毎日新聞 2022年6月25日(土) 精神障害の労災認定最多 21年度「パワハラ」原因トップ
- ③ 信濃毎日新聞 2022年11月30日(水) 生活雑記 「低所得者への圧迫」
- ④ 信濃毎日新聞 2022年4月15日(金) 残業代未払い 東映に是正勧告 「正義の味方」撮影現場なのに…
- ⑤ 信濃毎日新聞 昭和42年5月4日夕刊 1面「信州の百年(38)-産業の発達③-」
(一部抜粋・改、授業プリントのなかで使用)

4. 本時のポイント (特に新聞活用に関わる点)

- (1) 1960年から2010年までの日本における実質GDP(右上がり)と生活満足度(横ばい)を示すグラフを生徒に読み取らせる。そこから経済的に豊かになっても人々が幸せを感じられていないことを読み取らせ、「なぜ人々は経済的に豊かになっても幸せになっていないのか? 経済的に豊かになっている一方、何が起きているのか?」と疑問を抱かせる。
- (2) (1)の疑問の答えの一つとして、パワハラやセクハラ、長時間労働、賃金未払いといった労働問題に関する記事を生徒にタブレットで配信し、経済的な豊かさの裏に起こる労働者の苦しみを意識する。そのうえで、経済発展を見せる明治期にも同様なことがあったのではないかと想起させる。
- (3) 明治期の製糸工場で働く女工の労働環境を丁寧にまとめた、信濃毎日新聞 昭和42年5月4日夕刊 1面「信州の百年(38)-産業の発達③-」の抜粋(一部改)に空欄を設定し、統計資料の情報からその空欄を埋め、確実性の高い情報を読み取り、空欄のある新聞記事を完成させる。

-
- A black and white photograph showing a group of students in a classroom. In the foreground, a student with glasses and a dark jacket is leaning over a desk, writing in a notebook. To their right, another student with long dark hair, wearing a light-colored, fluffy jacket, is also leaning over the desk, looking at the same notebook. In the background, two other students are visible. One is wearing glasses and a dark jacket, looking down at a laptop. The other is wearing a dark jacket and glasses, looking towards the right. The students are all focused on their work, creating a studious atmosphere.

(以下は使用した新聞記事、詳細は本時の展開に記載)

[illegible]

信濃毎日新聞 2016 年 10 月 15 日付

信濃毎日新聞 2022 年 4 月 15 日

精神障害の労災認定 最多

21年度「パワハラ」原因 トップ

厚生労働省は14日、仕事で更新した認定のデータを公表した。原因で2つの病気の精神障害を患い、2021年度に労災認定されたのは前年度21件増の66件だった。発生した原因の6割は「パワハラ」で、強いストレスを感じ、働き方が職場でうまくいかず、3年連続で労災最多を記録している。認定された労災の推移は、

精神障害による労災申請も前年度比9.5増だった。46件で過去最多となった。労災認定は、働き方の関係心が高まり、精神障害が労災認定されることが増えている。

たのはいかに分析して

年度	労災認定数	過労自殺(未認定含む)
2012年度	50	100
13	55	100
14	50	100
15	55	100
16	50	100
17	55	100
18	50	100
19	55	100
20	50	100
21	66	100

信濃毎日新聞 2022 年 6 月 25 日

[illegible]

信濃毎日新聞 2022 年 11 月 30 日

東映に是正勧告
残業代未払い

残業代も払いがなかったとして、大手映画会社「東映」が中央労働基準監督署（東京）から是正勧告を受けていたことが14日、分かった。20代女性社員と加入する労働組合が記者会見した。テレビ作品「仮面ライダー」シリーズの21年1月から「仮面ライダー」のプロデューサー補佐として本格的に勤務。早朝から深夜まで働くこともあったが、東映は労働時間を把握せず「固定時間外手当」として時間外や休日の割増賃金を月約14万円しか支払わなかったという。

制作現場で働いた際、時間外労働や休日労働の割増手当が不十分だったという。東映は取材に「労基署よりすでに公平な判断を頂いており、判断に基づき対応している」とコメントした。

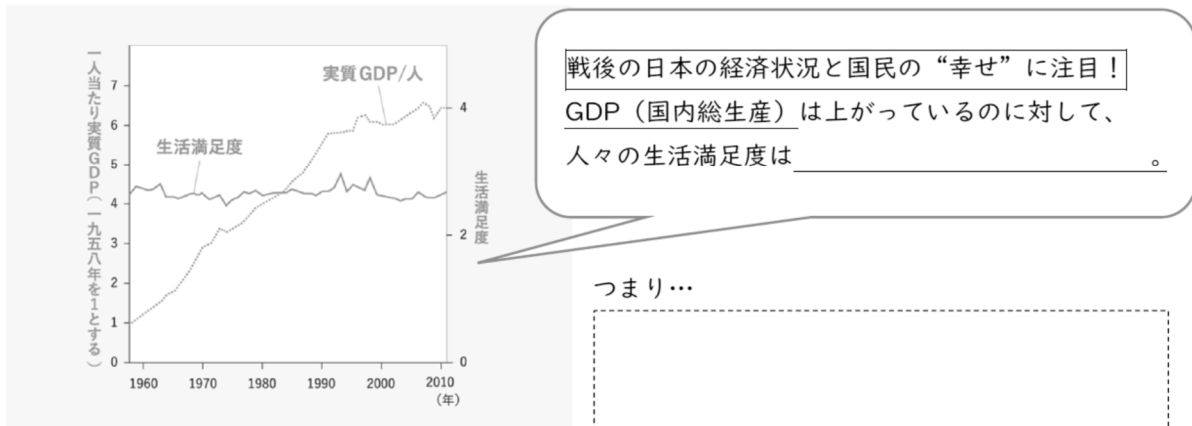
労組「総合サポートユニオン」によると、女性社員は2019年に入社。東映は労基協定（三六協定）で残業時間の上限を月45時間と定めたが、労基署は撮影現場で見習いをしていた19年12月～20年2月に上限を超えたと判断。女性側はこの間の残業時間は最長月113時間を超ったとしている。女性らは休職申し立てし、21年6月から休職中。

21年1月から「仮面ライダー」のプロデューサー補佐として本格的に勤務。早朝から深夜まで働くこともあったが、東映は労働時間を把握せず「固定時間外手当」として時間外や休日の割増賃金を月約14万円しか支払わなかったという。

東映は労使協定（三大協定）で残業時間の上限を月45時間と定めていたが、芳楽署は撮影現場で見習いをしていた19年12月～20年2月に上限を超過すると判断。女性側はこの間の残業時間は最長月113時間に上ったとしている。女性は体調を崩し、21年6月から休職中。

2年 組 番 氏名：

○ 産業革命の裏側に広がるもの



（資料Ⅰ 生活満足度と一人当たり実質 GDP の推移）

→その要因はなんだろうか？（メモ）

本時の“問い”

予想

学習課題

○ 労働環境の実態

・労働環境の実態を知るために、以下の新聞記事を読んでみよう！

明治三十年代、長野県は全国の器械製系工場の三分の一を占め、職工徒弟を十人以上雇っている工場は六百三十を超え、職工数は三万人を超え、二位の山梨県の工場数の百三十三、職工数八千六百人を大きく引き離していた。この職工の九十二％は女子で、県下五百二十二の向上を調べた結果、(1) 歳未満の子どもも働いていた。これは他県には見られないことだった。

このようなからだも十分成長していない子どもまで含んでいるのに、労働時間は約(2) 時間という過酷な状態である。日の出から日の入りまでというのが労働時間のめどであったが、夏の起床時刻は(3) 時起き、十二月でも六時起きだった。そのうえ、岡谷では、始業時に時計の針を早め、終業時には、規定以上に働かせるところもあった。起床の汽笛は各工場で鳴らしていたが、よその工場で時計の針をごまかせなくなるので、工場主が申し合わせてならなかった。岡谷の製系家たちは、労働時間は長い理由として、冬期間寒すぎて、一・二月は休業にするので、そのハンディキャップを埋めるためだ—と説明した。

それくらいだから休憩時間は食事休みさえも満足になかった。職工がかかる病気は消化器病が一番多かったが、「食事時間は(4) 分に制限する」と工場規則を設ける工場もあった。粗食であると同時に、(4) 分という食事の時間が極端に短いことが消化器病の原因になった。食堂といっても時間節約のため、腰掛を置かず立ち食いさせるところも多く、なかには、食堂に工女が集まるのも時間の無駄になる—と工女たちを働かせている工場でにぎりめしを配って、食べさせながら仕事をさせる工場もあった。また、当時の死因一位であった(5) の感染により解雇、帰郷された者も数多くいた。

【出典：信濃毎日新聞 昭和42年(1967年)5月4日(木)夕刊 1面「信州の百年(38)-産業の発達③-」より(一部抜粋・改)】

〈メモ〉

[illegible]

(6) 生徒の反応

① 新聞閲覧コーナーや人権教育委員会、2 学年での新聞記事の掲示

今年度より N I E 研究指定校となる以前から、各学年のフロアに新聞と新聞を読むための書見台を設置しており、日常的に新聞に触れられる環境を作ってきた。これを継続するとともに、生徒の興味を持つような新聞記事の校舎内での掲示を行うことで、比較的容易に新聞を閲覧できるようになったと思われる。いずれの学年でも、空き時間に新聞を読む生徒の姿が見られるようになった。

② 公開授業「産業革命と社会の変化」-劣悪な労働環境の実態-

生徒が、自身が生きる現代社会の諸問題に目を向けることで、学習を進める明治期の歴史とのかかわりを、新聞記事を活用することで実感できた。加えて、新聞記事から得られる情報で、教科書だけではわからない女工のおかれた惨状を、より実感できるようになったと思われる。また、ある生徒は授業のなかで、「こういった現状を変えるにはいまだったら選挙にいくってこと？」とつぶやいていた。主権者意識の芽生えを感じた。

新聞記事を使う学びの中で、教科書ではわからない意外性の獲得を可能にし、これから生きる主権者を育てることにつながることを、この授業で学ぶ生徒の姿を見て実感した。

(7) 成果と課題

今年度の実践のなかの成果として、記者自らの足で情報を獲得して記事を作るという、新聞ならではの表現方法を、生徒会での委員会活動などに置換できたことがあげられる。表現方法を学ぶとともに、報道される内容の裏の情報の正確さを、自らの活動のなかで実感し、情報の信用性について、生徒が身をもって学ぶことができた。

また、新聞記事を各教科の授業に使うことで、生徒に、自身が縁遠く感じる教科の内容について親近感を持たせることを可能にした。これは学力の三要素の一つである「主体的に学ぶ姿勢」と親和性が強い。新聞記事を活用することによって、学力向上がはかれるのではないかと感じた。

しかし、今年度の新聞活用は、生徒に「読ませる」ことがメインになった。指定校 2 年次となる来年度では、「読ませる」のではなく、生徒が主体的で「読む」授業を実践していきたいと考えている。方法は未定であるが、信濃毎日新聞データベースを活用して実践していきたい。